

JIRON KOHRON III

日本のエンタメも情眼を貪っていられない

国際ジャーナリスト

戸田光太郎

超ド級の衝撃力を持つ デイズニーのフォックス買収

猫の目のように変わる主戦場

米本国では、デイズニーによるフォックス買収が日本とは比べものにならないほど、遥かに大きなニュースとなっているが、それはなぜか？

この買収劇は大きく分けて、

- ① コンテンツのデイストリビューション革命からの観点
- ② 映画産業の構造変化からの観点
- ③ コンテンツの組み換えに伴う顧客からの観点

という、3つの観点から注目されている。

まず、①のデイストリビューションの観点から。米国では映画も含めた番組コンテンツを視聴者に届ける方法が、当然、当初はテレビ受像機のみだった。米国でのテレビ放送開始は非常に早く、1941年だった。広大な国土のために1950年代末には早くもケーブル・テレビが出現

しているが、主流はABC、NBC、CBSの、いわゆる三大ネットワークの時代が続く。

この間、どんなテレビは力をつけ、1960年代の後半には劇場映画を凌駕するようになり、ハリウッドは衰退した。時代背景もベトナム戦争の泥沼化で、明るいハッピーエンディング、天真爛漫な映画は姿を消し、主人公が死んでしまうようなアンチ・クライマックスのニューシネマが目立った。それと同時に、1970年代が終わりを告げると地上波3代ネットワーク一強時代は終焉し、ケーブル・テレビのMTVやCNN、HBOと多チャンネル時代に突入した。ビデオ後にDVDのレンタル・チエーンのプロックバスターが全米を席巻したのも1980年代半ば、1990年代で、この間三大ネットワークのCBSはMTVを有するメディア・コンglomリットのヴァイアコムに、

ABCはデイズニーに、NBCはGEを経て通信会社のコムキャストにそれぞれ買収された。

この間、プロックバスターのようなビデオやDVDのレンタル企業は衰退して行き、ストーリーミングで動画を見せる配信動画の企業、ネットフリックスやHulu、アマゾン・プライムビデオに取って代わられて来た。

全米中にあったプロックバスターの店舗は一気に消滅、会社も倒産した。そしてケーブル・テレビは現在も解約が続いており、時代はネット配信のストーリーミング・サービスに移行していることが分かる。

デイズニーは傘下のABCとフォックスがHuluの株を保有しているため、ネット配信業界をある程度牛耳ることができただけだが、さらにデイズニー独自のストーリーミング・サービスを2019年に立上げると発表。しかも、ネットフリックスより安価

な月額で殴り込むと言っている。

劇場映画の客を奪った地上波テレビはケーブルと戦いつつ、ビデオやDVDレンタル会社と熾烈に争い、遂にネット上のストーリーミングへと戦場を変えて来ており、デイズニーは、有料テレビ事業の落ち込みや新興IT勢力の攻勢に対抗するため、ネット動画配信への投資を拡大し、このネット配信分野での圧倒的な勝利を目指している。

さて次に、②映画産業の改変という観点。6大映画会社で最も古いパラマウントは、1990年代にCBSと前後してヴァイアコム傘下に入った。さて、ユニバーサル・スタジオは一期、旧松下電機産業（現パナソニック）がバブル期に買収していた。が、バブル崩壊期にカナダの酒造会社シークラムに売却、仏ヴィヴェンディを経てNBCとともにコムキャストの軍門に下った。



フォックス買収でさらに強力になるディズニー

1つだった。ハリウッドは5大映画会社となったのである。しかも、次に掲げるボックス・オフィスのシェアから見ると、まさに1位と3位が組んだ格好となる。

●1位…ディズニー	26・3%
●2位…ワーナー	16・7%
●3位…フォックス	12・9%
●4位…ユニバーサル	12・4%
●5位…ソニー	8・0%
●6位…パラマウント	7・7%

ディズニーは買収合意の一環で、フォックスの負債137億ドル（約1兆5400億円）を引き受けるため、

ワーナー・ブラザーズは1990年代に息盛んだったCNNのターナーの傘下に入るが、2000年にはAOLにタイム・ワーナーとして買収された後、2002年のITバブル崩壊で再びタイム・ワーナーとして吐き出された。

ソニー・ピクチャーズはコカコーラからスピンオフしたコロンビア・ピクチャーズをソニーが1980年代に買い上げたもので、低迷していたが1990年代後半から甦った。

今回ディズニーに買収されることになった21世紀フォックスは、ハリウッドにある6つのメジャースタジオの

勢に対抗し、独自のネット配信事業を目論む。

買収は株式交換を通じ実施し、フ

ォックスの株主は1株当たりディズニー株0・2745株を受け取る。M&A手続き完了後、フォックスの株主はディズニー株の約25%を保有することになる。映画は水もので、巨費を投じたからと言ってヒットするものでもなく、ギャンブル性が高い。だからこそ投資家は、メガヒットしそうな「実績のある」シリーズものを好む。今回の買収劇は人気シリーズの獲得という側面がある。

気になるコンテンツ独占の弊害

最後の③だが、我々観客はどう受け止めたらいいか。ディズニーが一部買収した21世紀フォックス（20世紀フォックスの親会社）は、フォックスのエンターテインメント部門である。映画製作・配給会社の「20世紀フォックス」と、ドラマ製作会社の「20世紀フォックステレビジョン」、フォックス21テレビジョンスタジオ」だけでなく、さらにケーブルTV局など、エンタメ部門を掌中に収めたことになる。

映画では「紳士は金髪がお好き」「王様と私」「イヴの総て」「サウンド・オブ・ミュージック」「明日に向かって撃て！」「猿の惑星」「ダイテ

ンハード」「タイタニック」など無数の名作群の権利が、ディズニーに渡る。加えてフォックスはアメコミ「マーベル」のスーパーヒーロー作品、「アバター」「デッドプール」の他、人気テレビ番組「モダン・ファミリー」や「ザ・シン普森ズ」などのメガヒット作を持つ。

テレビではフォックスの米国の有料放送番組「FX」や「ナショナルジオグラフィックチャンネル」、地域のスポーツ放送網も手に入る。また、メディア会社「スター・インディア」やフォックスが持つ衛星テレビ局「スカイ」や「タタ・スカイ」

の株式を得て、海外事業を拡大する。しかし、懸念はフォックスの低予算レーベル「サーチライト」の作る「ブラック・スワン」「バードマン」「スラムドッグ\$ミリオネア」のような良質の企画に、ディズニー首脳陣がゴーストを出さなくなるのではないかとということだ。我々は、王子とお姫様と、「何とかマン」ばかりの映画ではなくて、大人の鑑賞に耐えるヒューマン・ドラマが観たいのである。さもなければ「わが谷は緑なりき」を産んだフォックスの伝統は、ここで途絶えることになる。